
さがえり

光太郎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さとがえり

【Nコード】

N0529F

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

文月十三日、夕刻。燃えさかる迎え火の隣に、小太郎は座り込んでいた。導き手として、河向こうからやってくる古き人を迎えるために――。不思議系ジャパネスクファンタジー。

「なんでオイラなんだ」

燃えさかる炎の隣に座り込んで、小太郎は唇を尖らせていた。

理由なんて、本当はわかってる。担当だった青月が風邪をこじらせたからだ。ごめん、本当に悪いんだけど、と咳をしながら頭を下げられた。そこまでされて、長衆たちにまで任命されて、やらないわけにはいかないということだ。理解している。駄々をこねるほど、こどもじゃない。

けれど、不平一つ洩らさず、黙々と仕事をこなせるほど、おとなでもなかった。

「嫌いなんだよな、これ」

愚痴に答えるものはいない。それでも、小太郎はつぶやく。

空に向かって両手を広げる、無数の炎。ぴったり十尺ごとに、点々と、河岸を彩っている。不思議と熱はない。宿り木もなく、空気のなかで、ただ自己を主張している。

毎年、文月一三日に灯される炎だ。河向こうから訪れる、古き人を迎えるための炎。

それぞれの炎の隣には、幼子を中心とした導き手たちが控えている。すでに、役目を得て場から離れているものもある。

暮れなずむ空は赤く、まるで空と地の炎に景色のすべてが飲み込まれようとするかのようにだった。その情景は幻想的であつたが、小太郎の心には風情を感じる余裕などない。

「……早く終わらないかな」

始まってもしないのに、小太郎の口からそんな言葉がこぼれた。ひとりごとのつもりだったのだが、馬鹿にしたような笑い声がそれに答えた。

「まったく、情けないねえ。未熟者は未熟者らしく、おつとめに専念したらどうだい」

「——！ あいて！」

何か固いものにこづかれ、額を抑える。涙目で顔を上げると、丸い小さな提灯が、ぎよろりとした目を向けていた。

「なんだよ、おまえ」

精一杯の怒気を込めたつもりだったが、空を漂う提灯は、ありもしない肩をすくめるような仕草をしただけだった。中央よりやや下の部分をぱっくりと開け、大きな舌を出す。どう見ても、馬鹿にしている態度だ。

目と口だけで構成されているぶん、余計に表情豊かに思われた。

小太郎は頬を膨らませた。

「おまえ、失礼だぞ！」

「失礼はどっちだい、小太郎さんよ。長衆に盆提灯連れてけっていわれてただろう、さらっと忘れやがって。こちとら待ちぼうけよ、まるで彼女に振られたみたいに独り寂しく暗闇でぼんやりさ。わかるかい、俺様のこの悲しみ！」

大きな目をさらに大きく見開いて、提灯が詰め寄ってくる。その剣幕に、小太郎は気圧されてしまった。いわれてみれば、心当たりもあるのだ。一気にしょぼくれて、肩を落とす。

「わ、忘れてた。悪かったよ」

提灯は、至極意外そうに目をまたたかせた。

「おっと殊勝だね。そういうのは嫌いじゃない。俺様はロクロってんだ、よろしくな」

「よろしく、オイラは小太郎」

「知ってるさ、未熟者の小太郎坊主」

最後の言葉に、悪気はないようだった。歌うように未熟者を連呼して、楽しみに笑っている。

なんだか馬鹿らしくなってきた。小太郎は腰を上げ、着物についた砂利を払い落とす。

「導き手はこれで三度目なんだ。けど、君みたいな提灯を連れたことはなかったな」

「そういうこともあるってことさ。さあ、弦を握ってくれ。迎え火を俺様のなかに灯さなきゃあな」

「火？」

思わず聞き返す。そういえば、提灯のなりをしているわりには、ロク口の中身はもぬけの殻だ。

「そうさ、この迎え火じゃなきゃあ意味がない。それが俺様であることも重要だ。ささ、迎え火さんよ、この天下の盆提灯、ロク口さまのなかに入りねい」

身体を揺らしてロク口が告げると、炎の一部が飛び出した。小さな炎は、まるでネズミが己の尾を追いかけるかのような円を描きだす。どんどん加速したかと思うと、音もなくロク口のなかに収まった。

驚いて、小太郎はたったいま起こったことを頭のなかでくり返すように、手にしたロク口を見つめた。炎が灯っているのがわかる。

「すごいね」

素直に感嘆した。変化の妖術ならば幾度となく見てきたが、炎が踊るのを見るのは始めてだ。

「おっと、未熟者には刺激が強いかい。坊よ、おまえさんはまだ自在に変化もできないんだろ。人になったつもりだろうが、狐の尻尾が飛び出してるぜ」

「そんなことわかってる。苦手なんだ。きつとこればかりは、大人になっただって苦手だ」

同年代の仲間たちなら、すでに完璧にこなしている変化の妖術。それすらまともにできない小太郎だったが、それはもう、才能がどうのではなくて、「個性」だと納得していた。長衆にだって、変化が苦手なものはいるのだ。

小太郎の言葉に、ロク口は驚いたようだった。口をぱかりと開けて、隙間から、ふうんと声を洩らす。

それから、何かに気がついたように河向こうを見た。見開いていた目を細める。

「世間話はここまでだ。小太郎坊ちゃん、仕事だぜ」

「え？」

小太郎が河向こうを見ようとしたときには、その人物は二人の目の前に立っていた。

それは小さな老婆だった。

腰を丸めて、けれど顔はしっかり上げて小太郎を見て、老婆は柔らかに微笑んだ。皺いっぱいの目尻が下がって、もうどこが瞳なのかわからない。

「お待たせしてしまったかしら。どうぞ、よろしくね」

見た目から想像するのとおり、高く透き通った声でそういうと、彼女は丁寧な頭を下げた。

*

老婆は千都と名乗った。なんて優しそうな女性だろうと、小太郎は照れくさいような気持ちで挨拶をした。嫌な役回りだという思いがなくなったわけではないが、自分の身勝手な感情とこの女性は無関係なのだ。

「小太郎さん、盆の間お世話になります。ロクロさんは毎年お世話になっているわね。相変わらずお元気そうで、嬉しいわ」

「千都ちゃんも変わらずべっぴんさんだ。俺様は毎年あんたに会うのが楽しみでね」

「あら、お上手。でも、あと何度ここに来られるのかしら」

千都は寂しそくに笑った。会話の意味がわからず、小太郎はロクロを引き寄せると、小声で囁く。

「どういうことだよ？ 来られなくなるの？」

「まあそのあたりは、ひとそれぞれだなあ」

ロクロは舌で湿った空気を舐めあげて、わかるようなわからない

ような言葉を返した。

小太郎は小さく唇を尖らせたが、千都の前であれこれ詮索するの
もためらわれた。結局、それ以上は聞かずに弦を持ち上げ、行き先
を照らす。

彼らの前に、形としての道はない。薄暗い空間にあるのは、黄緑
色の無数の線。数え切れないほどの直線が何本も何本も行き交つて
いる。文月の三日間だけ、彼らはこの道なき道を往くことを許され
る。

黄泉の国の扉を開けて、生きてきた郷里を訪れる——文月の十三
日から十六日は、古き人のさとがえりの期間なのだ。

ひとでない人である小太郎たちは、その期間、導き手としての役
割を担う。古くから続けられてきた大切な役だ。長衆が迎え火を灯
し、幼子たちが導く。古き人は郷里に触れ、子々孫々の空気に触れ、
過ぎ去った記憶に触れ、そうして三日の後、黄泉の国へと帰ってい
く。

小太郎にだって、それがどれほど大切なことかわかっている。一
年の間、古き人がこの日を待ち望んでいただろうことも想像がつく。
けれど、小太郎には、どこか釈然としないものがあつた。

所詮、死んでしまった身じゃないかと、そんな思いがよぎるのだ。
もう決して戻れない場所に、たったの三日居座ったところで、何
が変わるというのだろう。相手には古き人の姿など、見えないとい
うのに。

「もうすぐだわ」

千都が弾んだ声で告げた。思考の波を漂っていた小太郎は、慌て
てロク口を掲げた。

「おい、小太郎坊よ、何があっても俺様離すんじゃねえぞ。そんな
ことしたら、千都ちゃんが二度とこつち側に戻れなくならあ」

やはり意味はわからなかったが、小太郎は頷く。導き手といって
も、実際に場所を知っているのは千都なのだ。小太郎はただ黙って、
彼女に付いていればいい。ロク口を離すなというのならば、いわれ

たとおりにするだけだ。

「ああ、やっと着いた。なんて懐かしい。一年ぶりね」

千鶴の声と同時に、眼前に景色が広がった。

気づいたときには、地面に立っていた。小太郎はまばたきをくり返し、映るものを確かめるように、瞳を凝らした。

そこには、何もなかった。

月明かりが照らすのは、ただただ、野原。

千都は背筋を伸ばすようにして、一步一步、歩みを進めていく。後を追わなくてはならないのに、小太郎は動けなかった。

着いた、と千都はいったのだ。

ならばここが、目的地に他ならない。

けれど、ふつうならあるはずの墓も、家も、そもそも人的なものが何一つ、存在していなかった。

「呆つとしてんなよ、小太郎さんよ。千都ちゃんからあんまり離れるな」

「え、でも……」

でも、何もないじゃないか——続く言葉を飲み込んで、取りあえず足を動かす。与えられた役目をまっとうしなくてはならない、小太郎にわかつているのは、いまのところそれだけだ。

「ああ、懐かしい。みんな、元気にしていた？ あら、あら、大きくなって。そうね、一年も経てば、大きくなるわよねえ」

千都は顔をほころばせ、草の上でひとり、喜々とした声を上げていた。

少し離れた場所からそれを眺めていた小太郎は、なんだか、妙な気分になった。

あまりにも現実味のない、眼前の光景。

過去に三度導き手をしてきたが、だれもが、自らの墓へ行き、そこへ訪れる子孫に語りかけ、かつての家で時を過ごした。千都のよくに、何もない場所へ訪れるというのは、初めてだ。

「当たり前だろう、坊主よ。家がいつまでも途絶えないと思うかい。

人間さんつてのは、刹那の時を戦に費やす生き物よ。なくなる家もある」

ロクロの言葉は、ゆっくりと、小太郎のなかに沈んでいった。なくなる家も、ある。

そんなことは、ロクロのいうとおり、至極当たり前のことだ。永い時を生きるひとでない人だって、戦をすることはある。住処を追われることもある。

「でも……もう、だれもないのに。何ももないのに」

力なく、小太郎はつぶやいた。

けれど、千都の幸せそうな表情はどうだろう。彼女には、あるはずのない何かが、見えているのだろうか。

「古き人つてのはな、黄泉からこっちに來たら、自分とつながりのある光を頼りに、さとがえりをするのさ。けど、見てみな、千都ちゃんみたいに、光そのものがない場合がある。そうすると、魂がさまよっちゃまうのさ。それをつなぎ止めるのが、俺様と、俺様のなかの炎つてわけだ。俺様の偉大さが、わかったかい」

得意げにロクロが解説してくるが、小太郎は感心してやる気にもなれなかった。

なぜ、そこまでして——どうしても、その疑問に行き着いてしま

う。

所詮、死んでいるのに。

何かが待っているわけではないのに。

だれも、何も、そこには在りはしないのに。

「そんなに、幸せだったの？」

思わず問いを口にしていた。

それは小さなつぶやきだったが、千都はふり返った。

答えずに、優しく目を細め、微笑んだ。

文月十三日の夕刻から、十六日の夕刻まで——それが、古き人に与えられた時間だ。

その間、導き手は古き人の元を離れることを許されていない。三日間、ただ、彼らのそばにいてはならない。

過去三度は、それでも、退屈だとは思わなかった。人間が入れ替わり立ち替わり手を合わせに来るのは見ていてなかなか飽きなかったし、楽しそうにする古き人の姿を見るのも悪くなかった。

けれど、今回は事情が違った。

野原に訪れて、丸三日——もう刻限が近づこうとしている。

千都は、ずっと、笑っていた。

困いも何もない地面にべたりと座り込んで、時折何かに話しかけて、笑って、笑って、そこにいた。

元より感じていた疑問が、小太郎のなかでどんどん大きく育っていた。

この行事に、何の意味があるというのだろうか——？

「ねえ、小太郎さん、こつちにいらっしやいな」

不意に名を呼ばれ、小太郎は一瞬返事をするのを忘れてしまった。ここに着いてからの三日間で、名を呼ばれたのは始めてだった。

導き手の存在など、忘れているのかと思ったのに。

「わたしはね、ここで、生きたのよ」

近づくと、千都は歌うような声で、そうつぶやいた。

広がる野原。風すら吹かず、時そのものが止まってしまったかのような空間で、時を感じることを忘れた千津が、うつとりと目を細めている。

小太郎は、千都を見た。驚いたが、何もいわずに、見つめた。

彼女はもう、老婆ではなかった。少女の姿になっていた。無邪気に、何も知らない子どもが、楽しそうに座っていた。

やがて、千都の身体が成長していく。あっという間に、老いてい

く。

一瞬でも、その表情が曇ることはなかった。静かな笑顔。

「ここで、生きたの。六十四年間。とても長くて、短いときだった」
「幸せだったんだね」

深く考えずに、その言葉は小太郎の口からこぼれた。

よほど幸せだったのだろう。

何も無いとわかっていても、毎年訪れたいと思うほどに。

そこまで考えて、違和感がよぎる。

幸せだったのなら。

たとえば、自分が幸せな一生を全うして、その後にすべてがなくなってしまうとして――

その場所に、もう一度来たいと、思うだろうか？

「両親は、わたしがまだ幼いころに死んだわ」

千津には何かが見えているのかもしれない。

何もない一点を見つめ、彼女は言葉を紡いだ。

「親戚からは疎まれ、ひとりで生きた。働いて働いて、恋をして、家庭を持った。お国の争いが始まって、あの人も死んでしまった。息子と娘が二人ずついたけれど、まだまだこれからというときに、流行り病で死んでしまった。わたしだけが、残ったの」

彼女の言葉には、何の感情もこもっていないように思われた。

小太郎は、息を飲んだ。

幸せだったんだね、などと。

恐ろしく簡単に、なんという言葉で片付けようとしたのだろう。

「……ごめんなさい」

謝罪を口にしてしまって、すぐに後悔する。その言葉自体、ひどく浅はかな響きを帯びていた。

けれど、千津は微笑んだ。

しわくちやの手で、そつと、小太郎の頭を撫でた。

「ありがとう」

彼女はとらわれているのかもしれない――ふと、そんな思いがよ

ぎった。

縛り付けられているのではないだろうか。生きていた記憶に足首を掴まれて、次に進めずにいるのではないだろうか。

たとえば、いま手にしているロクロを手放して、炎を消し去ってしまえば、彼女は解放されるのではないだろうか――？

「幸せもあつたわ。不幸せもあつた」

千津は、小太郎の思いをすべて見透かしたように、彼の丸い目を覗き込んだ。何かを重ね見るわけではなく、確かに小太郎を見て、はつきりと口にした。

「わたしは、ここで、生きたの。生きたのよ」

小太郎は、ロクロの弦をよりいっそう強く握り締めた。

炎を、消してはいけない。それでは意味がないのだから。

「時間だ、坊主、千津ちゃん。帰るぞ」

飄々としたロクロの声が、野原に落ちた。

*

三日前と同じ、しかし何かが確実に異なる風景の中に、小太郎たちは立っていた。

河が、夕日の赤と炎の赤とに挟まれている。この炎は送り火だ。

古き人たちを送り出す、別れの炎。

「ありがとう、小太郎さん、ロクロさん。また来年、会えるといいわね」

皺いっぱいの頬を緩めて目じりを下げ、千鶴が手を差し出す。

小太郎は、その手を握り返そうとして、しかしどうしても握ってはいけない気がして、上げかけた手を下ろした。

驚いたように小首を傾げる千鶴を見上げ、告白した。

「オイラ、導き手って嫌いだったんだ。死んだ人が生きた人に会い

に行くつて、何の意味があるんだつて思つてた」

「おいおい」

ロクロがゆらゆらと揺れる。木杵を押さえつけるようにしてロクロを黙らせ、小太郎は乾いた喉で懸命に息を吸い込んだ。

「ほんとは、いまもそれは、あんまり変わらない。けど、意味がないわけじゃないつてのは、わかった。千津さん見てたらさ……大事なことだつて、わかった」

「そう」

千津が微笑んでいる。

その表情を見ていたら、小太郎はなんだか泣きそうになった。ロクロの弦を強く強く握りしめ、ロクロが悲鳴を上げるのも聞こえたけれど、かまわずに続けた。

「けど、千津さん、やっぱり千津さんはもう、来なくていいよ。泣いてよかつたんだと思う。幸せもあつたけど、不幸せもいっぱいあつたねつて、哀しんだつてよかつたんだと思う。千津さんはぜんぶ、ぜんぶわかつてるんだから。だつて哀しいものは哀しいよ、それつてごまかせないだろ？ 死んでしまつてまで、お利口でいるんじゃないやなくてさ。そうじゃないと、せつかく幸せだつたことも、ちゃんと見てもらえなくて、かわいそうだ」

千津は目を見開いた。

河のせせらぎすら聞こえてこない。完全な沈黙が、彼らを支配する。

数拍の後に、ゆっくりゆっくり、千津は静かな笑みを形作つた。

くしゃりと笑んだ皺と皺の間から、涙が一筋、こぼれた。

見間違いかと思うような、静かな涙だつたけれど。

それが彼女の本当だとわかつたから、もう一度、小太郎は思いを舌に乗せた。

「オイラ、いつかお嫁さんもらうからさ。そしたら、オイラの子どもになつて、生まれてきなよ」

千津は笑おうと頬を緩めたが、結局涙が流れただけだつた。

小太郎の頭をもう一度撫でて、彼の額にそつと口付ける。
それから、きびすを返した。

背筋を伸ばして、河の上へ、足を踏み出す。

「またね」

少しだけ振り返って、そう告げた。

その言葉の意味を問うよりも早く、千津はまるで水面に映る小さな月のような、淡い光になった。そのまま、河向こうの巨大な炎に包まれるように、消えていく。

「生意気な坊主だ」

ロクロが舌を出して、小太郎を見上げた。

「それにやつぱり未熟者だ。なんで坊が泣くかねえ」

「だ、だって……」

小太郎はしゃくりあげていた。景色すべてが揺らいた。何故涙が止まらないのかわからなかった。けれど、たまらなく哀しいのだ。まるで、自分が自分では無いかのように、哀しいのだ。

「けど俺様、坊のこと嫌いじゃねえなあ。また来年も一緒にしようぜ」
「オイラは、もう、こんなのはゴメンだ」

泣きながら、どうにかして悪態をつく。けれど本心だ。

ロクロは笑った。全身を揺らして笑うと、からだの中から迎え火であったものが飛び出した。くるくると円を描き、炎は河の中に消えてしまう。

「俺様たち盆提灯は、この三日間だけの特別任務なんですね。そろそろドロンするが、哀しくて泣くんじゃねえぞ」

「誰が泣くか。お、男は泣かないんだ」

ロクロは、小太郎の涙をべろりと舐め上げた。ごく愉快そうに全身を揺らし、小太郎の耳元で囁く。

「千津ちゃんの親戚っていうのがろくでなしだね。ごくつぶしと罵って、幼いあの子を追いついたんだ。そのくせ他の親戚連中には、うちで面倒みるからって金銭要求してさ。おかげで潤った一生を過ごしたんだが、死を目前にして、その旦那が己の愚かさにやっと

気づいた。なんてことしたんだってね。まあ、気づいたところでもう遅い。そういう道に外れた魂つてのは、その次は人間にも、ひとでない人にもなれず、まあ盆提灯に生まれ変わるのがせいぜいのところさ」

やっと、小太郎の涙が止まった。

ロクロの言葉を、頭の中で繰り返した。

どうして、そんな話をするのだろう。

老婆である千津のことを、なぜ「千都ちゃん」と呼ぶのか、不思議に思っていたけれど。

「ロクロ、それって、つまり——？」

「でもまあ、俺様の役割も、きつと今年で終わりだなあ」

それだけ告げたかと思うと、小太郎の手の中の提灯が、一気に重みを増した。ずしりとのしかかる負荷に、驚いてよろめきそうになる。

確かにあつたはずの、ぎよろりとした大きな目と、ぱっくりと開いた口と、そこから飛び出した舌とが、なくなっていた。

いつの間にか、送り火も消えている。

陽は完全に隠れ、星がまたたいている。

すべてが夢であつたかのようだ。小太郎は、しばらく呆然と突っ立っていたが、やがて力なく、役目を終えた盆提灯を胸に抱いた。

「……やっぱり、嫌いだ」

唇を噛んで、小さく呟いた。

星を見上げ、河に背を向け、歩き出す。

やがて夜が更けるだろう。

そうして、必ず、朝が来るのだ。

望もうが疎もうが、それは誰の上にも、平等に。

了

（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

これは、黒雛桜先生のイラストを元にした物語です。
黒雛先生のイラストを元にした短編『ムギワラギク』と同じ世界観
となっております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0529f/>

さとがえり

2010年10月8日15時15分発行